

高齢者の使いやすさ検証コミュニティ 原田PJ『みんラボ』会員 40 名余が

清水PJ開発の「《心積り》ノート」を大検証

茨城県つくば市 2015.06.26.Fri.

「高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発」PJの原田悦子先生（筑波大学大学院人間系心理学域 教授）が開発した『みんラボ（みんなの使いやすさラボ）』は、機械や車の操作から食品などの包装の扱いやすさまで、さまざまなモノやシステムの使いやすさを検証するコミュニティです。今回検証するのは、原田PJと同じRISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」領域のPJから生まれた「《心積り》ノート」。高齢者の「最期の時間」をより良いものにするために、当事者ひとりひとりが記す意思決定の支援ツールです。



「使いやすさ」の目利きの皆さんに、どんなご意見をいただけるのでしょうか。

★その医療・ケア、受けたいですか？

「《心積り》ノート」とは、東京大学大学院人文社会系研究科特任教授の清水哲郎先生の「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」PJが開発する、医療・ケアの意思決定プロセスノートです。配られたノートをめくりながら、清水先生からの問いかけが始まります。



改良を重ねてきたノートは、イラストやグラフをふんだんに使い、わかりやすさに工夫しています。

「やがて少しずつ衰え、口から栄養を摂れなくなったとき、皆さんは胃ろうなどの人工的な水分・栄養補給を望みますか？」

それで元気になるなら…と頷くひと、不自然なことはしたくない、と拒否するひと。さまざまな医療・ケアの選択について、具体例を引きながら考えるうちに、ノートの目的が自然と腑に落ちてきます。

「医療やケアのほんとうの目的は、ただ延命することではなく、よい人生のために生命を整えることですよ？」

救急車を呼ぶか、手術はどこまでするか、人工呼吸器や透析は…こうした選択肢をひとつひとつ選んでいくのは、大変な作業です。現代の高度な医療・ケアの数々とそのメリット・デメリットを並べるだけで、情報は膨大なものになります。

★「老いかた」≡「生きかた」

参加者は6グループに分かれ、ノートに書き込みながら、自由に意見や感想を口にしていきます。意外にも、「考えたこともなかったけど、私はこうしたい！」という、はっきりとした発言が次々飛び出しました。



盛り上がるディスカッション。グループごとのファシリテーターが、意見を書き留めます。

「私はこうしたい」という望みは、「私はいままでこうして生きてきた」というバックボーンから生まれてくるもの。ノートのプロセスに沿って自分自身の「これまで」を振り返り「今後」を考えることで、スムーズに自分の選択肢に行き着けるようです。

ひととおりご意見を伺ったところで、グループごとの発表と質疑応答の時間をとりました。



原田先生の司会進行で、参加者から次々と感想や意見が。「読む量が多くて大変！」「エンディングノートもつけてほしい」「そのときどきで『更新』する必要があるそう」など、など。

★周囲の納得を得るためにすべきこと

質疑応答では、「ノートに書いても、周囲がその通りにしてくれないかも」という不安の声も上がりました。

「いやいや書いておけば、家族もちょっとは考えてくれるんじゃないかな？」

そんな前向きなご意見が出る反面、「妻がノートに『私に延命措置はしないで』と書いていても、延命してしまうだろうな…生きていてほしいもの」という本音も漏れ聞こえました。

ノートをひとりで黙々と記すのではなく、周囲と話し合っ共有しておくことが、ほんとうのノートの活用につながっていくのかもしれないですね。



「《心積り》ノート」の完成は、平成27年9月を予定しています。

今日は RISTEX の泉紳一郎センター長も、グループに入れていただいで《心積り》中。